第 1 章　本連携取組の概要

1. 本取組の 3 つの柱について

関西国際大学　学長補佐 / 評価センター長 / 人間科学部
藤木　清

1.1　趣旨

高等教育のユニバーサル化により、学生の多様化は、学習目的、学習意欲、学習習慣、学力の各側面で進行している。多くの大学、とりわけ小規模の私立大学においては、様々な学生を受け入れつつ、限られた資源の中で、学士課程教育の質保証の実現を可能にする“仕組み”をいかにして確立するかが問われている。この課題解決のためには、個々の教員任せではなく、教育目標やマネジメントの手法を共有するというように、教員集団の意識を転換させ、組織的教育の実施が可能となる教学マネジメントを確立していく必要がある。本取組でいう教学マネジメントとは、各大学が自らの使命や教育理念に基づいて掲げたディプロマポリシー（学修到達目標）の達成に向けて、体系的な教育課程を構築し、教育方法を改善し、教員間・科目間の連携を図り、学修成果の測定方法を可視化して、組織的な教育を実現することである。

具体的に、本取組では 3 つの柱を実施している。

1 つ目の柱は、学修の質を向上させる上で教育効果が高いといわれる体験活動をとおした HIP（High-Impact Practices：ハイ・インパクト・プラクティス）による教育方法を充実させることである。

本取組では、HIP を教室内におけるアクティブラーニング（能動的学修）と教室外体験学習プログラムに大別している。教室外体験学習プログラムとして本取組が取り上げるものは、第一に、課題発見能力を培う調査型プログラム、第二に、社会の人材ニーズを踏まえたインターンシップ型プログラム、第三に、地域や国外のサービス活動を学習資源とするサービスラーニング型プログラムである。

2 つ目の柱は、学修成果の評価方法を開発し、可視化することである。具体的には、ルーブリック（評価の観点と段階的な基準を明示した評価表）および到達テストの開発と活用である。ルーブリックを作成することにより学修の評価の観点と基準を可視化し、教員と学生との間で目標と評価の観点の共有を目指す。教室外体験プログラムにおいては、実習先受入れ担当者との間においても共有を目指していく。

3 つ目の柱は、組織的教育を可能にする教学マネジメントを確立することである。教員一人ひとりの教授スキルの向上に加え、教員の個性を活かしながら、体系的な教育課程に基づいて、教員間の連携、科目間の連携を図り、組織的な教育を実現していく。そのためには、各連携校において大学全体および学部学科の教育目標を明確にして、それらを達成するための教育課程や教育方法を全学的に充実することが重要となる。そのためには、大学全体の教育目的を教員集団全体に周知する

組織体制、達成可能な目標や教育課程・方法の設定または見直し、教育環境の充実、そして、教員個人の教授スキルをはじめ、シラバスの充実、授業外学修時間の確保、厳格な評価など授業全体をデザインする力を向上するための方策が重要な要素になる。

以下、3 つの柱に沿って具体的な取組について述べる。

1.2 HIP の充実

HIP とは、AAC&U（Association of American Colleges and Universities）が提唱しているもので、アクティブラーニング（能動的学修）や教室外体験学習プログラムなどを構造化し、学生に強いインパクトを与えるよう工夫した教育プログラムの総称である。また、入学後できるだけ早期の段階で、強い経験を与えることにより、学生の大学生活への適応を早めるという効果もある。

教室内の授業では、教員の一人ひとりがグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションなどのアクティブラーニングを取り入れた授業運営を行うことができるように各校において FD 研修会を実施している。これは、各教員が、アクティブラーニングの手法を修得し、学習目標の設定から、学習目標に見合った授業内容および授業方法の準備、授業外での学修、評価方法まで一貫性のある授業デザイン力を修得することを目指したものである。

その結果、グループワーク、ペアワーク、プレゼンテーションを中心としたアクティブラーニングの手法が、実際の授業で取り入れられている。

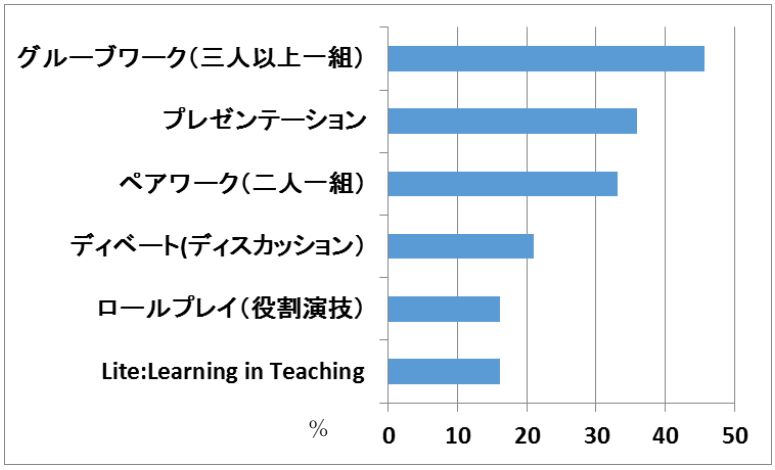

図 1-1. 授業で導入したアクティブラーニングの手法（2013 年度教員調査（連携校））

また、より効果の高い授業運営にするために、アクティブラーニングの授業にどのような要件が必要であるのかについて、教室内授業分科会を連携校間で設定し、各校から代表者が参画して、『学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意識したアクティブラーニング型授業の要件』を取りまとめた（資料 1-1）。

この要件は2014年1月に取りまとめられ、今後、各大学でこの要件に沿い、授業を充実させていくこと、また、状況把握のため、各校において定期的に調査していくことを申し合わせた。2013年度末の状況は図1-2のとおりである。

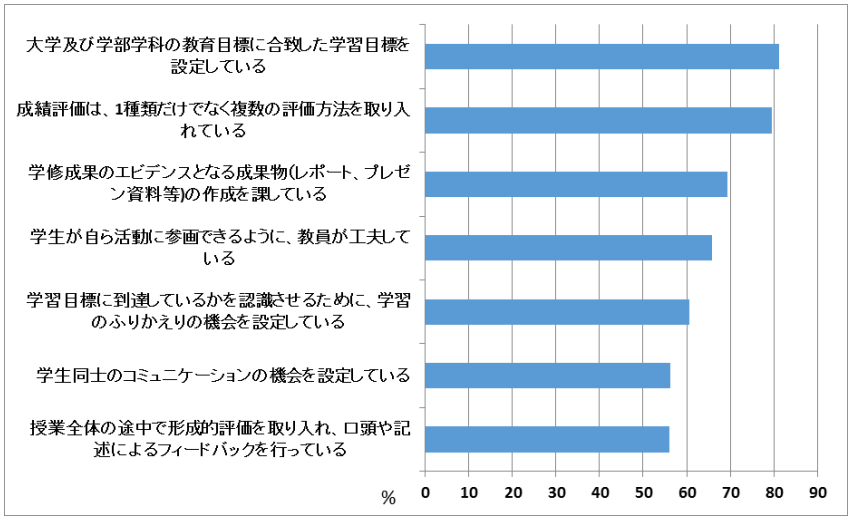

図 1-2. 授業で実施しているか（2013年度教員調査（連携校））

結果、学習目標の設定や複数の評価方法の導入は8割の授業で行われている。しかしながら、ふりかえり、フィードバック、学生同士のコミュニケーションの機会の設定は6割以下にとどまっている。さらに、全ての要件を満たしている授業については、代表校である関西国際大学で5割程度、他の連携校は10～30%にとどまっている。

教室外体験学習プログラムについては、まず、各校の既存のプログラムを学習目標の設定から、活動内容、ふりかえりの方法、評価方法まで、学習目標に到達できるよう見直した。そのために、プログラムに必要な要件を教室外プログラム分科会において作成した（資料1-2）。

なお、各連携校で実施しているHIPの具体的なプログラムについては、第3章で述べる。

1.3 学修成果の評価方法の開発

HIPによる教育方法の充実や教学マネジメントの確立が、学生の学修成果に表れていることを確認するためには、評価体制づくりが必要である。本取組では、学修成果の量的な測定方法として、ルーブリックと到達テストの開発と活用を検討してきた（第4章で詳述）。

代表校ですでに開発したライティング、プレゼンテーション、リサーチの共通ルーブリックに加え、本取組において新たに多様性理解、チームワーク、学修成果の統合の共通ルーブリックを開発した（資料1-3）。図1-3は代表校における全授業におけるルーブリックの活用状況である。

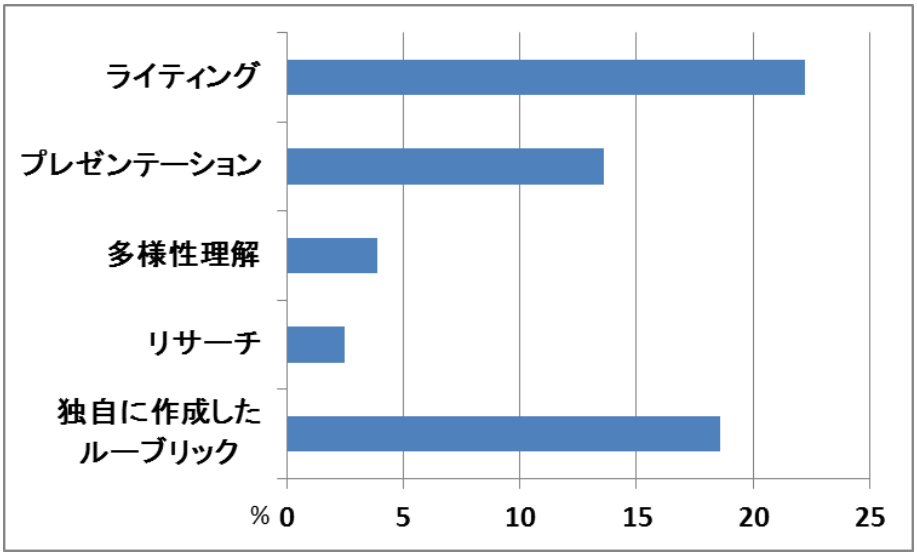

図 1-3. ルーブリックの授業への導入状況（2013 年度教員調査（関西国際大学））

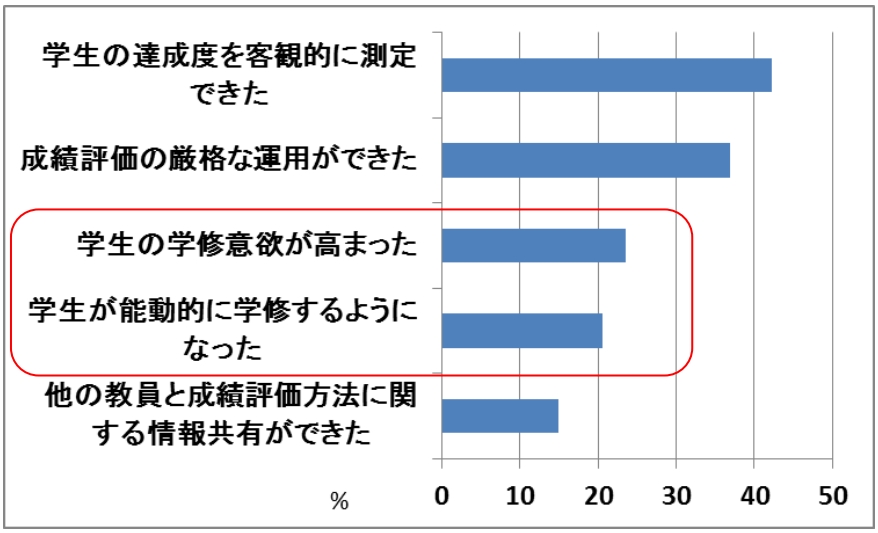

図 1-4. ルーブリック導入の効果（2013 年度教員調査（関西国際大学））

また、共通ルーブリックの導入により得られた効果は、図 1-4 のとおりであった。この結果で特に注目したいのは、「学生の学修意欲が高まった」、「学生が能動的に学修するようになった」という項目である。ルーブリックの活用により、学生の主体的な学びにつながる効果が見られた。

1.4 教学マネジメントの確立

本取組において、教学マネジメントに関して最初に行ったことは、ディプロマポリシーないし大学および学部学科の教育目標（以下、ディプロマポリシー等）の見直しである。各校とも大学の建学の精神や教育理念があり、それに基づいて学生が獲得すべき学修成果をディプロマポリシー等の形で明示している。重要なことは、このディプロマポリシー等が達成可能であり、かつ評価可能で

あることである。この観点に立って、ディプロマポリシー等を見直すことが、教学マネジメントシステムの確立の第一歩であると考えた。さらに、大学の内部質保証のためにはディプロマポリシー等の達成状況を把握しなければならない。そのためには、大学が明示している学修成果の獲得状況を把握するための方針（アセスメントポリシー）を構築する必要があり、各連携校で検討を行っている。また、アセスメントポリシーを実行するためには、学生一人ひとりの学修に関する情報を一元化して収集・分析し、改善に資する仕組み（学生支援型 IR）の構築が重要である。現在、連携校間で学修行動調査の調査内容の共通化を行うともに、財団法人大学入試センターが開発した「言語運用力テスト」と「数理分析力テスト」を共通して実施し、共通の分析ができる環境を整えている。

次に組織体制である。前述のとおり、ディプロマポリシー等を達成するためには、個々の教員のスキル向上にとどまらず、体系的な教育課程の構築、教員間・科目間の連携、学修成果の測定方法の開発を進めていくためには、組織的な体制が重要となる。各連携校では、学長もしくは副学長クラスのマネジメントの下、研究所、センターあるいは委員会など、それぞれの大学に合わせて教育改革を促進する組織を設定し、FD の企画・運営や情報発信を行っている。

さらに、それらの組織を中心にして、各連携校内において HIP やルーブリックの活用を広めるために FD 研修会や勉強会を開催している。2013 年度は、代表校である関西国際大学の全学 FD 研修会に他の連携校の教員が参加した。2014 年度は、連携校同士で FD 研修会や勉強会を開放する形で交流を進めた。

各連携校の教学マネジメントについては、第 2 章で紹介する。

1.5 今後の展望

本取組は、HIP の充実と学修成果の可視化を全学的な教学マネジメント体制の下で、組織的に進めていくところに特徴がある。これまでは HIP の充実については、アクティブラーニング型授業や教室外体験プログラムの導入を進めてきた。また、学修成果の可視化については、主にルーブリックによる評価を重視してその開発と利用を進めてきた。そして、定期的に連携校間で合同会議を開催し、取組を共同して推進するとともに、年 1 回連携校の学長・副学長クラスが出席する全体会を開催して取組のチューニングを行ってきた（資料 1-4）。

2015 年度以降は、引き続き、3 つの柱を中心に取組を進めていく。HIP については、要件に見合った教室内の授業や教室外学習プログラムを量と質ともに充実させていく。学修成果の評価方法については、ルーブリックの活用を各連携校で広めていくとともに、論理的思考に関するテストの共同開発を視野に入れる。そして、教学マネジメントに関しては、各校でアセスメントポリシーの実践に重点を移していく。具体的には、IR の強化を図り、教育改善、学生支援、および施策の意思決定への活用について連携校間で共同研究を進め、活用していく。合わせて IR 担当者の養成も行っていく。

資料 1-1. 学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意識したアクティブラーニング型授業の要件

大学間連携共同教育推進事業では、学生の主体的な学びのために、ハイ・インパクト・プラクティスを充実させていくことが１つの柱となっている。そこで、教室で行われる授業を想定し、学生の主体的な活動を促進し、学修成果を得るためのアクティブラーニング型授業の要件を以下のとおり整理する。これらの要件を満たす授業を各連携校において充実していく。

・・・・

授業科目の「学習目標」、その達成に向けた「学習活動」、達成度を測定する「評価方法」を三位一体として明確に設定することが必要である。その上で、次の要素を満たすことが重要である。

≪学習目標≫

1. 各授業科目の学習目標として、学修成果を設定していること。ここでの学修成果は、授業をとおして修得できる汎用的な能力、専門的な知識および技能等のうち、大学および学部学科の教育目標に合致しているものを指す。

≪学習活動≫

2. 学習目標が達成できる活動であること。
3. 学生が自ら活動に参画できるよう設計されており、また、教員が関与して仕向けていること。
（学生任せになっていないこと）
4. 学習目標の達成を認識するために、ふりかえりの機会が活動の途中および活動後に設定されていること。
（機会例：個人のふりかえりだけでなく、グループやクラスでの発表・意見交換による共有も含めることが望ましい）
5. 学生同士のコミュニケーションの機会が設定されていること。
（設定された学習目標によっては、学生同士が議論する機会の設定が必要）
6. 学修成果のエビデンスとなる成果物の作成が課されていること。
（成果物例：レポート、プレゼンテーション、ビデオ、ニュースレター等）

≪評価活動≫

7. 形成的評価が取り入れられ、教員からできるだけ早く、口頭や記述によるフィードバックがあること。
（フィードバック例：全体への説明、グループへの説明、個々の学生への説明）
8. 評価には、多様な評価方法が取り入れられていること。
（評価方法の例：テスト、ルーブリック等）

資料 1-2. 学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意図した教室外プログラムの要件

本事業では、学生の主体的な活動と大学等の教育目標の達成に向けた教室外プログラムの要件を示す。

学習目標と目標達成に向けた学習活動、それら取組の成果を測定する評価方法が、三位一体となって明確に設定されている必要がある。プログラムには、教員が関与する多様な経験や体験をとおした学術的な学びと現実世界を往還させる仕組みがあり、ルーブリック等の客観的な評価規準を活用し、教員と学生との質の高いインタラクションによって展開されるものである。

学生の主体的な学びを引き出すには次の要件が必要である。

≪学習目標≫

1. 学習目標として、大学や学部学科の教育目標に合致した、汎用的あるいは専門的な知識および技能等の修得を設定していること。

≪学習活動≫

2. 学習目標が達成できる活動であること。
3. 学生の意欲がかき立てられ、取り組みがいのある活動であること。
4. 学生が自ら活動に参画できるよう設計されており、また、教員が関与して仕向けていること。
（学生任せになっていないこと）
5. 多様な経験や体験をとおして学術的な学びと現実世界を往還させる仕組みがあること。
6. 学習目標の達成を認識するために、ふりかえりの機会が活動の途中および活動後に設定されていること。
（機会例：日々の活動記録や活動日誌といった個人の振り返りだけでなく、グループやクラスでの発表・意見交換による共有も含めることが望ましい）
7. 学生同士やステークホルダー（学外活動の受け入れ先である団体や組織の担当者や関係者等）とのコミュニケーションの機会が設定されていること。
（設定された学習目標によっては、学生同士やステークホルダーと議論する機会の設定が必要）

≪評価活動≫

8. ステークホルダーからの評価が組み込まれていること。
9. 形成的評価が取り入れられ、教員による迅速で効果的なフィードバックがあること。
（フィードバック例：全体への説明、グループへの説明、個々の学生への説明）
10. 総括的評価に用いる成果物には、多様な表現方法が取り入れられていること。
（成果物の例：ビデオ、プレゼンテーション、ニュースレター、レポート等）

資料 1-3. コモンルーブリック

□コモンルーブリック（リサーチ）

2011 年 7 月 28 日

コモンルーブリック(リサーチ)

全体

	5	4	3	2	1	0
テーマのたて方（調査目的の設定）	独創的で、明確なテーマが設定されていて、それについての仮説や調査項目が分かりやすく整理されて示されている。	明確で、実現可能なテーマが設定されていて、それについての仮説や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、それについての仮説や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、一般的な仮説や調査項目がたてられている。	テーマは設定されているが、仮説や調査項目が分かりにくい。	テーマがはっきりしない。調査項目、および仮説が示されていない。
これまでに明らかにされている知見の活用	信頼できる様々な情報源から、これまでに明らかにされた知見や課題を、自分が明らかにしようとしている内容に関連づけて活用している。	信頼できる複数の情報源から、これまでに明らかになった知見を、リサーチに関連づけて活用している。	複数の情報源からこれまでに明らかになった知見を示し、整理している。	複数の情報源から、これまでに明らかになった考え方や研究内容を、部分的であっても示している。	限られた情報源から、これまでに明らかになった考え方や研究内容を、何かしら紹介しているが、テーマとの関係が乏しい。	これまでの先行研究について示されていない。
研究方法と分析の視点	複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしいいくつかの研究方法を用い、明確な分析の視点を示している。	複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしい研究方法を用い、分析の視点を示している。	目的とテーマに沿った研究方法を用い、分析の視点を示している。	研究方法と分析の視点について、必要なポイントを捉えている。	研究方法と分析の視点について示されているが、必要なポイントが捉えられていない。	研究方法と分析の視点が示されていない。
分析	焦点に沿ってリサーチした内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・重要な型（パターン化）の発見など様々な観点から検討している。	リサーチした内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・パターン化など様々な観点から検討している。	リサーチで得られた情報をまとめ、類似点・相違点・パターンなど何らかの法則性を検討している。	リサーチで得られた情報をまとめることができている。	リサーチで得られた情報を列挙しているが、まとめることができていない。	リサーチした内容をまとめられていない。
結論	リサーチから明らかになったことについて整理し、専門基礎知識（自分の専門分野の概念や枠組み）を効果的に用いて、論理的に説明できている。	リサーチから明らかになったことについて整理し、専門基礎知識を用いて論理的に説明できている。	リサーチから明らかになったことについて記述し、専門基礎知識をある程度用いて説明できている。	リサーチから明らかになったことについて記述し、専門基礎知識を用いて説明しようとしている。	リサーチから得られた情報についての記述はできているが、専門基礎知識を用いての説明はできていない。	リサーチから得られた情報の記述もできておらず、専門基礎知識も用いられていない。

● コモンルーブリック（リサーチ）の全体を示したものです。これをもとに下位学年用と上位学年用を作成しています。

1

関西国際大学

2011 年 7 月 28 日

コモンルーブリック(リサーチ)

1 年生春学期～2 年生春学期（下位学年用）

	3	2	1	0
テーマのたて方（調査目的の設定）	実現可能なテーマが設定されており、それについての仮説や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、一般的な仮説や調査項目がたてられている。	テーマは設定されているが、仮説や調査項目が分かりにくい。	テーマがはっきりしない。調査項目、および仮説が示されていない。
これまでに明らかにされている知見の活用	複数の情報源からこれまでに明らかになった考え方や研究内容を示し整理している。	複数の情報源から、これまでに明らかになった考え方や研究内容を、部分的であっても示している。	限られた情報源からであるが、これまでに明らかになった考え方や研究内容を、何かしら紹介しているが、テーマとの関係が乏しい。	これまでの先行研究について示されていない。
研究方法と分析の視点	目的とテーマに沿った研究方法を用い、分析の視点を示している。	研究方法と分析の視点について、必要なポイントを捉えている。	研究方法と分析の視点について示されているが、必要なポイントが捉えられていない。	研究方法と分析の視点が示されていない。
分析	リサーチで得られた情報をまとめ、類似点・相違点・パターンなど何らかの法則性を検討している。	リサーチで得られた情報をまとめることができている。	リサーチで得られた情報を列挙しているが、まとめることができていない。	リサーチした内容をまとめられていない。
結論	リサーチから明らかになったことについて記述し、これまでに学んだ考え方や研究内容とある程度関連付けて説明できている。	リサーチから明らかになったことについて記述し、これまでに学んだ考え方や研究内容を用いて説明しようとしている。	リサーチから得られた情報についての記述はできているが、これまでに学んだ考え方や研究内容を用いた説明はできていない。	リサーチから得られた情報の記述もできておらず、これまでに学んだ考え方や研究内容も用いられていない。

● このルーブリックは「1 年生春学期～2 年生春学期」を対象としています。

2

関西国際大学

□コモンルーブリック（プレゼンテーション）

コモンルーブリック(プレゼンテーション)2011＊＊＊＊　　2011年9月6日版

全体

	5	4	3	2	1	0
論点の明確さ	主要な論点や主張及び最も言いたいことが、聴衆が聞いていてはっきりとして分かりやすく、強く印象に残る。	主要な論点や主張が伝わり、最も言いたいことははっきりとして分かりやすい。	論点や主張が整理されていて、基本的な論点が分かるようになっている。	論点や主張についての整理がある程度（部分的に）出来ており、言いたいことがある程度伝わってくるが改善するべき点がある。	論点や内容の整理が十分でなく、言いたいことがあまり伝わってこない。	論点が明確でなく、何が言いたいことなのかが全く伝わってこない。
論理的構成と展開	結論に至るまでのプロセスが、プレゼンテーションの効果を高める応用型（年代順型、問題解決型、分析型等）を用いて構成されており、論理的に一貫した内容になっており、説得力がある。	結論に至るまでのプロセスが、プレゼンテーションに関する基本型（序論、本論、結論の流れ）を用いて構成されており、論理的に一貫しており理解しやすい。	結論に至るまでのプロセスは、プレゼンテーションに関する基本型（序論、本論、結論）を用いて構成している	結論に至るまでのプロセスはたどれるが、構成・展開の型や、内容の論理性に改善すべき点がある。	結論に至るまでのプロセスの整理ができていない。結論は示されているが、なぜそのような結論になるのかわかりにくい	論理的構成をたどることができない。
主張の立論に必要な資料（図表、統計、文献引用等）の利用	立論に必要な資料（説明、事例、図、統計、類推）を、効果的で信頼のできる複数の情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）から選択して正しく引用し用いている。	立論に必要な資料を、信頼できる複数の情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）から選択し、用いている。	立論に必要な資料を用いているが、情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）の選択や、引用方法や長さがある程度（部分的に）できている。	立論に必要な資料を用いているが、情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）の選択と選択部分が適当であるとはいえず、引用・参照方法に改善すべき点がある。	立論に必要な資料を参照しているが、出典が明らかでなく、立論の根拠とは伝わってこない。	立論に必要な資料を使えていない。
プレゼンテーションの技術（音声的表現：声の大きさ、声の高さ、話すスピード、話の間の取り方など）	言葉の選択が適切であり、声の大きさや声の高さ、話すスピードや間の取り方が適切である。聞き手にとってわかりやすく効果的なプレゼンテーションになっている。	言葉の選択に誤りがなく、声の大きさや声の高さ、話すスピードが適切で、話の間の取り方が聞き手に配慮されている。	言葉の選択にほとんど誤りがなく、声の大きさや声の高さ、話すスピード、話の間の取り方がある程度（部分的に）できている。	言葉の選択の誤りは部分的にみられ、声の大きさや声の高さ、話すスピード、話の間の取り方（「え－」「あの－」といった口頭のつなぎ言葉が耳に残る等）のいずれかに改善すべき点がある	言葉の選択に誤りがあり、声の大きさや声の高さ、話すスピードが適切で、話の間の取り方（「え－」「あの－」といった口頭のつなぎ言葉が多い）に問題がある。	言葉の選択に誤りが多く、音声的表現の技術を意識的に使えていない。声が聞き取りにくく、終始一本調子である。

1

関西国際大学

コモンルーブリック(プレゼンテーション)2011＊＊＊＊　　2011年9月6日版

プレゼンテーションの技術（非音声的表現：アイコンタクト、身振り、姿勢、服装、雰囲気など）	聞き手に対する目配りや身振り、姿勢等の効果的な身のこなしで、聞き手の反応を確認しながら魅力的なプレゼンテーションをしている。資料やノートに眼を落とすことよりも聴衆により多くの視線を向けながら話している。場に合った服装で発表者が自信を持って堂々と話しているように見える。	聞き手に対する目配りや身振り、姿勢等の効果的な身のこなしができている。資料やノートに眼を落としてはいるが、聞き手に視線を向けながら話している。場に合った服装で話している。	聞き手に対する目線や身振り、姿勢等の効果的な身のこなしが部分的にできている。資料やノートに眼を落としてはいるが、聞き手に時折目線を向けながら話している。場に合った服装で話している。	聞き手に対する目線や身振り、姿勢等の身のこなし方や服装のいずれかに改善すべき点がある。聞き手に視線を向けるより、資料やノートに眼を落としながら話している。	聞き手に視線を向けることがほとんどなく、資料やノートを読みしながら話している。第三者に伝わりにくい発言や態度が見られ、服装にも問題がある。	聞き手をまったくみておらず、非音声的表現がまったく活用されていない。第三者にわかりにくい発言や態度に終始しており、場をわきまえない服装で違和感を感じさせている。

- 必要に応じてこのコモンルーブリックの下段に項目を追加することができます。
- これをもとに下位学年用のライティングⅠ、および上位学年用のライティングⅡを作成しています。
- 通常は、対象学年にあわせたルーブリックをご利用ください。

2

関西国際大学

コモンルーブリック(プレゼンテーション)2011＊＊＊＊　　2011年9月6日版

1年生春学期～2年生春学期（下位学年用）

	3	2	1	0
論点の明確さ	論点や主張が整理されていて、基本的な論点が分かるようになっている。	論点や主張についての整理がある程度（部分的に）出来ており、言いたいことがある程度伝わってくる。	論点や内容の整理が不十分で、言いたいことがあまり伝わってこない。	論点が明確でなく、何が言いたいことなのかが全く伝わってこない。
論理的構成と展開	結論に至るまでのプロセスが、プレゼンテーションに関する基本型（序論、本論、結論）を用いて構成できている。	結論に至るまでのプロセスはたどれる。構成・展開の型と、内容の論理性に改善が必要である。	結論に至るまでのプロセスの整理ができていない。結論は示されているが、なぜそのような結論になるのかわかりにくい。	結論が明確でなく、論理的構成をたどることができない。
主張の立論に必要な資料（図表、統計、文献引用等）の利用	立論に必要な資料（本、論文、Web、リサーチ結果等）を選択して用いている。	立論に必要な資料は用いている。情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）の選択や選択部分の選択に改善が必要である。	立論に必要な資料を参照しているが、出典が明らかでなく、立論の根拠としては十分ではない。	立論に必要な資料を使えていない。
プレゼンテーションの技術（音声的表現：声の大きさ、声の高さ、話すスピード、話の間の取り方など）	言葉の選択にほとんど誤りがなく、声の大きさや声の高さ、話すスピード、話の間の取り方がある程度（部分的に）できている。	言葉の選択の誤りは部分的で、声の大きさ、声の高さ、話すスピード、話の間の取り方（「え-」「あのー」といった口頭のつなぎ言葉が耳に残る等）のいずれかに改善すべき点がある。	言葉の選択に誤りがあり、声の大きさや声の高さ、話すスピードが適切で、話の間の取り方（「え-」「あのー」といった口頭のつなぎ言葉が多い）などに問題がある。	言葉の選択に誤りが多く、音声的表現の技術を意識的に使っていない。声が聞き取りにくく、一本調子である。
プレゼンテーションの技術（非音声的表現：アイコンタクト、身振り、姿勢、服装、雰囲気など）	聞き手に対する目線や身振り、姿勢等の効果的な身のこなしができている。資料やノートに眼を落としてはいるが、聞き手に時折目線を向けながら話している。場に合った服装で話している。	聞き手に対する目線や身振り、姿勢等の身のこなし方や場に合った服装が部分的にできている。聞き手に視線を向けるより、資料やノートに眼を落としながら話していることが多い。	聞き手に視線を向けることがほとんどなく、資料やノートを読みしながら話している。第三者に伝わりにくい発言や態度が見られ、服装にも問題がある。	聞き手をまったくみておらず、非音声的表現がまったく活用されていない。第三者にわかりにくい発言や態度に終始しており、場をわきまえない服装で違和感を感じさせている。

- このルーブリックは「1年生春学期～2年生春学期」を対象にしています。
- 必要に応じて、このコモンルーブリックの下段に項目を追加することができます。

3

関西国際大学

コモンルーブリック(プレゼンテーション)2011＊＊＊＊　　2011年9月6日版

2年生秋学期～（上位学年用）

	3	2	1	0
論点の明確さ	主要な論点や主張、最も言いたいことが、聴衆の誰が聞いてもはっきりとして分かりやすく、強く印象に残る。	主要な論点や主張、最も言いたいことがはっきりとして分かりやすい。	論点や主張が整理されていて、基本的な論点が分かるようになっている。	論点や主張についての整理が部分的に出来ており、言いたいことがある程度伝わってくるが明確とはいえない。
論理的構成と展開	結論に至るまでのプロセスが、以下のようなプレゼンテーションの効果を高める応用型を用いて構成されており、論理的に一貫した内容になっており、説得力がある。 ・年代順型 ・問題解決型 ・分析型	結論に至るまでのプロセスが、プレゼンテーションに関する基本型（序論、本論、結論）を用いて構成されており、論理的に一貫しており理解しやすい。	結論に至るまでのプロセスが、プレゼンテーションに関する基本型（序論、本論、結論）を用いて構成しているが、論理的なつながりに改善すべき点がある。	結論に至るまでのプロセスはたどれるが、構成・展開の型と、内容の論理性に改善すべき点がある。
主張の立論に必要な資料（図表、統計、文献引用等）の利用	主張の立論に必要な資料（説明、事例、図、統計、類推）を、主張の立論に効果的で信頼のできる複数の情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）から選択して正しく引用し用いている。	主張の立論に必要な資料を、信頼できる複数の情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）から選択し、用いている。	主張の立論に必要な資料を用いているが、情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）の選択や、引用方法、長さに改善すべき点がある。	主張の立論に必要な資料を用いているが、情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）の選択や選択部分が適切とはいえず、引用・参照方法の一部に誤りや不十分な点がある。
プレゼンテーションの技術（音声的表現：声の大きさ、声の高さ、話すスピード、話の間の取り方など）	言葉の選択が適切であり、声の大きさや声の高さ、話すスピードや間の取り方が適切である。その結果、聞き手にとってわかりやすく効果的なプレゼンテーションになっている。	言葉の選択に誤りがなく、声の大きさや声の高さ、話すスピードが適切で、話の間の取り方が聞き手に配慮されている。	言葉の選択にほとんど誤りがなく、声の大きさや声の高さ、話すスピード、話の間の取り方が部分的にできている。	言葉の選択に誤りがみられ、声の大きさや声の高さ、話すスピード、話の間の取り方（「え-」「あのー」といった口頭のつなぎ言葉が耳に残る等）のいずれかに改善すべき点があるが、いくつかの音声的表現の技術を使おうとしていることは伝わってくる。

4

関西国際大学

コモンルーブリック(プレゼンテーション)2011＊＊＊＊　　2011年9月6日版

プレゼンテーションの技術（非音声的表現：アイコンタクト、身振り、姿勢、服装、雰囲気など）	聞き手に対する目配りや身振り、姿勢等の効果的な身のこなしで、聞き手の反応を確認しながら魅力的なプレゼンテーションをしている。資料やノートに眼を落とすことよりも聴衆により多くの視線を向けながら話している。場に合った服装で発表者が自信を持って堂々と話しているように見える。	聞き手に対する目配りや身振り、姿勢等の効果的な身のこなしができている。資料やノートに眼を落としてはいるが、聞き手に視線を向けながら話している。場に合った服装で話している。	聞き手に対する目線や身振り、姿勢等の効果的な身のこなしが部分的にできている。資料やノートに眼を落としてはいるが、聞き手に時折目線を向けながら話している。 場に合った服装で話している。	聞き手に対する目線や身振り、姿勢等の身のこなし方や服装のいずれかに改善すべき点がある。 聞き手に視線を向けるより、資料やノートに眼を落としながら話している。

- このルーブリックは「2年生秋学期～」を対象にしています。
- 必要に応じて、このコモンルーブリックの下段に項目を追加することができます。

5

関西国際大学

□コモンルーブリック（ライティング）

コモンルーブリック（ライティング）2012＊＊＊＊　　2012年4月28日版

1年生春学期～2年生春学期（下位学年用）

	3	2	1	0
課題に対する記述	課題に対する解答が書かれている。	課題に対する解答を部分的に書いている。	課題に対する解答を書こうとしているが論点にズレがあり、テーマに対する解答として十分ではない。	課題と関係ない内容を書いている。
論理的構成	結論に至るまでの論理的なプロセスをたどることができる	結論に至るまでのプロセスはたどれる。前後関係の構成に工夫が必要である。	結論に至るまでのプロセスが整理しきれていない。	結論に至るまでのプロセスを示していない。
レファレンス資料（着想を得たものや自分の考えを支持するための先行研究や文献、データ）	レファレンス資料を適切に示して、引用や注をつけている。	レファレンス資料を示そうとしている。引用・参照方法に改善が必要である。	レファレンス資料を参照していることがうかがえるが、示していない。	レファレンス資料を使っていない。
文章の体裁 **①段落が適切に作られている。** **②句読点の付け方が適切である。** **③主部と述部の対応にねじれがない。** **④文体が統一されている。**	文章の体裁の項目に配慮できている。	文章の体裁の項目のいくつかは配慮できている。	文章の体裁に配慮しようとしているが、不十分である。	文章の体裁が整えられておらず、読み進めることができない。
表現の推敲 **①同じ言葉の繰り返しや多用がない。** **②誤字・脱字がない。** **③仮名使い・送り仮名の誤りがない。** **④専門用語を正しく用いている**	表現の推敲ができている。	表現の推敲のいくつかはできている。	表現の推敲をしようとしているが、不十分である。	表現に間違いが多く、推敲が不十分である。

- このルーブリックは「1年生春学期～2年生春学期」を対象にしています。
- 科目の必要に応じて、このルーブリックの下段に項目を追加することができます。

1

関西国際大学

コモンルーブリック（ライティング）2012＊＊＊＊　　2012 年 4 月 28 日版

2 年生秋学期～（上位学年用）

	3	2	1	0
課題に対する記述	課題に対する解答が的確で、過不足なく網羅して書いている。	課題に対する解答を書いているが、一部に求められてないことも書いている。	課題に対する解答を部分的に書いているが、改善すべき点がある。	課題に対する解答を部分的書いているが的確ではない。
論理的構成	結論に至るまでのプロセスが整理されていて分かりやすい。前後関係を必要かつ十分に書き、論理的に一貫している。	結論に至るまでのプロセスは整理されて一貫しているものの、前後関係の論述に余分や重複がある。	結論に至るまでのプロセスは一貫しているが、前後関係の論述に改善すべき点がある。	結論に至るまでのプロセスはたどれるが、前後関係や論理性が十分ではない。
レファレンス資料（着想を得たものや自分の考えを支持するための先行研究や文献、データ）	レファレンス資料の選択が的確であり、適切に過不足なく引用や注を付して参照している。	レファレンス資料の選択が妥当で、参照できており、出典も明記されている。	着想を得たものや自分の考えを支持するためのレファレンス資料を示そうとしているが、引用方法や長さに改善すべき点がある。	レファレンス資料を示そうとしているが、引用・参照方法に間違いがある。
文章の体裁 **①段落が適切に作られている。** **②句読点の付け方が適切である。** **③主部と述部の対応にねじれがない。** **④文体が統一されている。**	文章の体裁の項目の全てが出来ており、違和感なく平易に読み進めることができる。	文章の体裁の項目中、3点が出来ている。	文章の体裁の項目中、2点が出来ている。	文章の体裁の項目中、1点は出来ているが、誤りの方が多く不十分である。
表現の推敲 **①同じ言葉の繰り返しや多用がない。** **②誤字・脱字がない。** **③仮名使い・送り仮名の誤りがない。** **④専門用語を正しく用いている。**	表現の推敲の項目の全てが出来ており、慎重かつ丁寧に推敲され、誤りが見られない。	表現の推敲の項目中、3点が出来ている。	表現の推敲の項目中、2点が出来ている。	表現の推敲の項目中、1点のみ出来ているが、誤りの方が多く不十分である。

2

関西国際大学

コモンルーブリック（ライティング）2012＊＊＊＊　　2012 年 4 月 28 日版

- このルーブリックは「2 年生秋学期～」を対象にしています。
- 科目の必要に応じて、このルーブリックの下段に項目を追加することができます。

コモンルーブリック　ライティング（全体）

	5	4	3	2	1	0
課題に対する記述	課題に対する解答が的確で過不足なく網羅して書いている。	課題に対する解答は書いているが、一部に解答と関係ないことも書いている。	課題に対する解答が一通り書かれているが、改善すべき点がある。	課題に対する解答を部分的には書いているが、的確ではない。	課題に対する解答を書こうとしているが論点にズレがあり、テーマに対する解答として十分ではない。	課題と関係ない内容を書いている。
論理的構成	結論に至るまでのプロセスが整理されていて分かりやすい。前後関係を必要かつ十分に書き、論理的に一貫している。	結論に至るまでのプロセスは整理されて一貫しているものの、前後関係の論述に余分や重複がある。	結論に至るまでのプロセスは一貫しているが、前後関係の論述に改善すべき点がある。	結論に至るまでのプロセスはたどれるが、前後関係や論理性が十分ではない。	結論に至るまでのプロセスが整理しきれていない。	結論に至るまでのプロセスを示していない。
レファレンス資料（着想を得たものや自分の考えを支持するための先行研究や文献、データ）	レファレンス資料の選択が的確であり、過不足なく参照できている。	レファレンス資料の選択が妥当であり、参照できている。	レファレンス資料を示そうとしているが、引用方法や長さに改善すべき点がある。	レファレンス資料を示そうとしているが、引用・参照方法に間違いが見られる。	レファレンス資料を参照していることがうかがえるが、示していない。	レファレンス資料を使っていない。
文章の体裁 **①段落が適切に作られている。** **②句読点の付け方が適切である。** **③主部と述部の対応にねじれがない。** **④文体が統一されている。**	文章の体裁が整えられており、違和感なく平易に読み進めることができる。	文章の体裁の項目中、3点が出来ている。	文章の体裁の項目中、2点が出来ている。	文章の体裁の項目中、1点のみ出来ている。	文章の体裁に配慮しようとしているが、不十分である。	文章の体裁が整えられておらず、読み進めることができない。
表現の推敲 **①同じ言葉の繰り返しや多用がない。** **②誤字・脱字がない。** **③仮名使い・送り仮名の誤りがない。**	慎重かつ丁寧に推敲されており、誤りが見られない。	表現の推敲の項目中、3点が出来ている。	表現の推敲の項目中、2点が出来ている。	表現の推敲の項目中、1点のみ出来ている。	表現の推敲をしようとしているが、不十分である。	表現に間違いが多く、推敲が不十分である。

3

関西国際大学

コモンルーブリック（ライティング）2012＊＊＊＊　　2012 年 4 月 28 日版

④専門用語を正しく用いている。						

● コモンルーブリック、ライティングの全体を示したものです。これをもとに下位学年用と上位学年用を作成しています。

4

関西国際大学

□コモンルーブリック（多様性理解）

コモンルーブリック：多様性理解　　**2013 年 9 月 1 日版**

KUIS 学修ベンチマークの「心豊かな世界市民」とは、多様な世界の人々や自分たちの社会について理解を深め、他者に対する共感的な感覚や態度を身につけ、世界市民として行動できる心豊かな人材になることである。とりわけ、多様性理解では、自分や、自分と同じ社会的・文化的背景を持つ人たち、異なる社会的・文化的背景を持つ人たちがいることを理解し、多様な世界や社会を大切に考え、柔軟に行動できるような能力の獲得を目標としている。

	4	3	2	1
文化に対する自己理解	異なる文化に直面しても、その違いを尊重することができる。文化について自分がどのような偏見を持っているかを理解し、異なる文化に冷静に対処することができる。	異なる文化に直面して、その違いを尊重することができる。文化について自分がどのような偏見を持っているかに気がついている。	異なる文化に直面して、自分たちの文化との間に違いがあることに気がついている。	異なる文化と自分たちの文化の違いを理解できず同じようにとらえている。
文化の枠組みに関する知識	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史のそれぞれが、相互に関連する重要な要素であることを理解し、複数の文化に関する知識を深めている。	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史のそれぞれが、相互に関連する重要な要素であることを理解している。	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史について基本的な理解をしている。	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史をぼくぜんと知っている。
他の文化に対する知的好奇心	他の文化について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や幅広い関心を持っている。得られた応答をもとに、さらにものの見方を発展させたり調べたりするなどして、自らの疑問や関心について掘り下げている。	他の文化について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や関心を持っている。得られた応答から、新たな疑問や関心を発展させている。	他の文化について、これまでの学習に基づいた疑問や関心を持っている。	他の文化について、単純な疑問や関心を持っている。
自分とは異なる文化に属する人々との交流	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、自分から能動的・主体的に話題提供を行ない、交流を活発にしている。	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、自分から能動的に交流の輪に加わって話題提供を行なっている。	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、自分から自己紹介や挨拶を交わし、交流の輪に加わっている。	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、周囲から促されれば、自己紹介や挨拶程度の会話ができる。

文部科学省　平成 24 年度大学間連携共同教育推進事業　取組名「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」関西国際大学、淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作用大学

□コモンルーブリック（チームワーク）

目標型コモンルーブリック全体版（チームワーク）2013＊＊＊＊　　2013 年 12 月 9 日版

定義

メンバー個人の行動(チームの課題にかける労力、他のメンバーとの交流におけるマナー、チームの話し合いに対する貢献)

	4	3	2	1
チームでの話し合いへの参加	チームでの話し合いにおいて、話し合いを進展させるような建設的発言を積極的にしている	チームでの話し合いにおいて発言を行い、話し合いをリードしている	チームでの話し合いにおいて関連する発言を行っている	チームでの話し合いの場に参加している
チームメンバーの話し合いへの参加の促進	メンバーの発言に対して、他のメンバーがそれに関連づけて発言できるような話し合いの流れを作りだすことで、メンバーの積極的参加を促している	メンバーの発言を整理し、関連づけた上で発言するなどして、メンバーの積極的参加を促している	メンバーの発言に対して、あいづちをうつ、うなずくなどして理解を態度に示すことで、メンバーの話し合いへの参加を促している	メンバーの話を遮ることなく聞くようにしている
グループワークへの個人の貢献	グループワークに積極的に参加して、高い完成度での課題の達成に多大な貢献ができている	グループワークに参加し、課題の達成に貢献できている	グループワークに参加して、作業の遂行に協力している	グループワークに参加して、要望を受けて作業を手伝っている
チームの雰囲気作り	チームの状況の変化に応じて、率先してチームの雰囲気をより良くする、あるいは雰囲気が悪くなった時にはそれを解消するような発言や行動をしている	チームの雰囲気を良くするために、自ら率先して発言や行動をしたり、メンバーのサポートをしたりしている	チームの雰囲気が良くなるようにメンバーに合わせた発言や行動をしている	チームの雰囲気を悪くするような発言や行動をしたり、態度に表したりすることなく、チームに参加している

- 科目の必要に応じて、このルーブリックの評価の観点の一部と、他のルーブリックの評価の観点を組み合わせて活用することができます。

文部科学省　平成 24 年度大学間連携共同教育推進事業　取組名「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」関西国際大学、淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作用大学

資料 1-4. 全体会の次第

第１回　大学間連携共同教育推進事業　全体会

日　時：２０１２年１０月１２日（金）　１３：００～
場　所：関西国際大学　尼崎キャンパス１０階大会議室
出席校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学、関西国際大学
出席者：資料１参照

会次第

１．開会

２．各大学学長挨拶

３．出席者の紹介（各大学より）　【資料１】

４．事業の全体像の説明　【資料２－１、２－２】

５．本年度の取組
（１）米国先進事例調査　【資料３】
（２）大学入試センターからの依頼　【資料４】
（３）ディプロマポリシー（DP）、カリキュラムポリシー（CP）、
カリキュラムの見直しに向けた現状把握　【資料５】
（４）ハイインパクトな教育方法の充実及び
ルーブリックの開発について　【資料６－１、６－２】
（５）連携校からの確認事項　【資料７】
（６）2013 年度末までの実施計画について（依頼）　【資料８】
（７）交付申請書の確認
（８）会議日程について（推進会議全体会、推進会議、各部会）

６．閉会

以　上

第 2 回　大学間連携共同教育推進事業　全体会

日　時：2013 年 10 月 12 日（土）14:15～17:15
場　所：関西国際大学　尼崎キャンパス 10F　大会議室
出席校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学、関西国際大学

次 第

1.開会の挨拶
　関西国際大学　学長　濱名篤

2.出席者のご紹介（各大学より）

3.経過報告（全体）【資料 1】
　関西国際大学　学長補佐　藤木　清

4.各校の教育目標等の状況について【資料 2】
　淑徳大学　　学長特別補佐・コミュニティ政策学部長　磯岡　哲也
　北陸学院大学　　副学長　朝倉　秀之
　くらしき作陽大学　学長顧問　高等教育研究センター所長　有本　章

5.アセスメントプランの構築に関する提案について【資料 3】
　関西国際大学　学長　濱名　篤
　関西国際大学　学長補佐　藤木　清

＜休　憩＞

6.共通学生調査の提案について（大学 IR コンソーシアムと独自調査）【資料 4】
　関西国際大学　学長補佐　藤木　清

7.関西国際大学のグローバルスタディについて【資料 5】
　関西国際大学　高等教育研究開発センター次長　山本　秀樹

8.閉会の挨拶
　淑徳大学　学長　足立　叡

（敬 称 略）
以　上

第３回　大学間連携共同教育推進事業　全体会

日　時：2015 年 2 月 14 日（土）13:30～17:00
場　所：関西国際大学　尼崎キャンパス 10F　大会議室
出席校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学、関西国際大学

次 第

1.開会の挨拶　　13：30～13：35
　　関西国際大学　学長　濱名篤

2.出席者紹介（各大学より）　13：35～13：45
　　淑徳大学・北陸学院大学・くらしき作陽大学・関西国際大学

3.取組の現状について　13：45～14：05　【資料 1】
　　関西国際大学　学長補佐　藤木清

4.HIP 及びルーブリックに関する振り返りについて　14：05～15：10　【資料 2】
　　淑徳大学　コミュニティ政策学部 准教授　矢尾板俊平
　　北陸学院大学　短期大学部　教授　富岡和久
　　人間総合学部 准教授　若山将実
　　くらしき作陽大学　高等教育研究センター　田崎慎治

＜休　憩＞　15：10～15：30

5. 取組の展開について　15：30～17：00　【資料 3】
　　関西国際大学　学長　濱名篤
　　関西国際大学　学長補佐　藤木清

6.閉会の挨拶　17：00～
　　淑徳大学　学長　足立叡

（敬 称 略）

以　上

2. 本取組の特色

淑徳大学　高等教育研究開発センター
芹澤　高斉

2.1　大学間の連携体制

4 つの連携校による協働により事業推進を図る上で、連携校間での調整が重要となる。本取組において、学長・副学長クラスおよび取組担当者が出席する全体会が、各年度に 1 回、これまでに計 3 回開催されている。この全体会では、連携取組全体および各連携校の進捗状況や課題が共有され、内容の調整が行われている。

前述の 3 つの柱を中心とした具体的な取組内容やその連携について協議するため、本事業取組担当者による遠隔会議システムでの大学間連携共同教育推進事業合同会議が、基本的に毎月、定例会として開催されている。この会議において、進捗の管理や課題の共有の他に、各種打ち合わせが行われている。

平成 25 年度には、取組内容ごとに、教室内授業部会、教室外プログラム部会、ルーブリック部会が作られ、必要に応じて遠隔会議システムによる会議が開催された。これらの会議では、プログラムの開発やルーブリックの開発や運用のための調整が行われた。学生の主体的な学びを促進する「学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意識したアクティブラーニング型授業の要件」（資料 1-1）および「効果的な教室外プログラムの要件」などもこれらの会議で議論され、作成された。

取組の進捗については、各連携校が統一フォーマットの「現状の整理シート」を毎年度作成し、共有することで管理・調整が行われている。このシートには、各連携校における取組内容、各年度の目標、現状、課題が整理されている。

2.2　連携 FD と合同勉強会

取り組みにあたり、本事業開始 1 年度目の平成 24 年度より、内外の有識者による連携 FD 研修会や合同勉強会が開催されている。平成 24 年度、25 年度には、アクティブラーニング、ルーブリックなどのテーマで、関西国際大学の FD 研修会や合同勉強会が開催され、各連携校から取組担当者が出席した。また、これらは遠隔会議システムにより、各連携校に配信された。

平成 26 年に入ると、代表校に加えて各連携校においてもアクティブラーニング、ルーブリック、サービスラーニング、学生支援型 IR などのテーマで連携 FD 研修会が開催され、他の連携校から取組担当者等が出席した。

以上のように、事業推進にあたって、連携 FD 研修会や合同勉強会が開催され、各連携校において FD を推進するファシリテーターの知識やスキルの向上が図られている。

2.3　プログラム開発過程での連携校間での協働

本事業において、教室内外プログラムの改善や新規開発によりハイ・インパクト・プラクティスのモデルとなるプログラムを整備することが計画されている。連携校間での共同プログラム開発に向けて、平成 26 年度、関西国際大学が実施しているグローバルスタディに北陸学院大学の教員と淑徳大学の教員が参加している。これまで、連携校からグローバルスタディプログラムへの学生の参加は得られていない。連携校間でのカリキュラムが異なり、調整が困難であることなど参加が難しい要因はいくつか存在するが、学生のプログラムへの参加は、主体的かつ深い学びにより、高い学修成果を得るための共同プログラムを開発するうえで、課題となっている。

2.4　連携取組の評価体制等

本取組では、連携機関以外に外部評価委員を依頼し、定期的に外部評価委員会を開催、評価を受け、事業推進を行っている。平成 25 年度、関西国際大学において、評価会議が開催され、本取組の実施状況について各部会および連携校からの説明を行い、評価委員より評価および指導・助言を受け、取組を進めている。

本取組における成果や課題は、大学教育学会におけるラウンドテーブルや本取組が主催するシンポジウムなどを通じて情報発信し、連携校外への普及を図っている。

2.5　連携校から代表校への出向とその後

取組 2 年目の平成 25 年度において、連携校である 3 大学から取組 3 年目以降に各本務校においてファシリテーターとして事業を推進するが教員が、関西国際大学に 1 年間出向した。この間、2.1 で述べた大学間での連携体制のもとで、連携校がそれぞれ先行している取組について、当該校において先行事例として取組が進められ、連携校間で取組事例を提供し合うなどの分担を行いながら、事業が推進された。連携 3 大学からの出向者 3 名は、平成 25 年度関西国際大学において、効果的な教育方法やルーブリックなどの評価方法の開発を行い、教学マネジメント構築に参画した。

平成 26 年度、出向者はそれぞれの本務校に戻り、出向先で得た知見を活かして、取組を行っている。

補論１　くらしき作陽大学におけるファシリテーターの役割

くらしき作陽大学　子ども教育学部・高等教育研究センター
田崎　慎治

1）FD 研修会の開催

くらしき作陽大学では、今年度、ファシリテーターである筆者が中心となり、くらしき作陽大学高等教育研究センター（以下，KSU 高等教育研究センター）FD 研修会を新たに実施した。その概要については、以下のとおりである。

・主　催：KSU 高等教育研究センター

・目　的：「教育力&学修力の向上」をメインテーマに、文科省大学間連携共同教育推進事業選定取組「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」の一環として、昨年度関西国際大学へと出向した、田崎慎治助教の１年間の成果の報告とともに、本学のこれからの教育改善に向けて、アクティブラーニングやルーブリックに関する研修を月１回程度行っていく。

・対象者：くらしき作陽大学教職員

・日時および内容（平成 26 年 12 月末時点）

回	日　時	内　容	講　師
第１回	6 月 9 日 16：50–18：15	「4 大学プロジェクトの方法」 「ルーブリック開発の最前線」	有本　章[1)] 田崎慎治[2)]
第２回	7 月 14 日 16：50–18：15	「ルーブリック作成の実際－実践篇」 「アクティブラーニングの促進とルーブリックに基づく評価」	田崎慎治 芝崎良典[3)]
第３回	8 月 7 日 13：30–17：00	「講演会：学生を楽しませる授業の最前線」 「パネルディスカッション：授業改革の現在—4 大学を中心に」	橋本　勝[4)] 田崎慎治 芹澤高斉[5)] 富岡和久[6)]
第４回	11 月 7 日 16：50–18：15	「アクティブラーニングの方法」 「ASB の活用事例」	田崎慎治 河村敦[7)]

1)KSU 高等教育研究センター所長，2)くらしき作陽大学子ども教育学部・高等教育研究センター助教，3)くらしき作陽大学子ども教育学部准教授，4)富山大学大学教育支援センター教授，5)淑徳大学高等教育研究開発センター准教授，6)北陸学院大学短期大学部教授，7)くらしき作陽大学食文化学部准教授

第 1 回目は、本事業におけるくらしき作陽大学の事業推進責任者代行である有本章 KSU 高等教育研究センター所長により、本事業の全体的な概要について改めて確認、説明を行うとともに、筆者がルーブリックの開発に関する説明を行った。第 2 回目は、筆者がルーブリックの作成に関する留意点等を含めた具体的な方法について説明を行い、本事業の推進代表者である芝崎良典准くらしき作陽大学子ども教育学部教授より、アクティブラーニングおよびルーブリックの導入事例について紹介した。第 3 回目は、KSU 高等教育研究センターの公開講演会の一環として行われ、橋本勝富山大学大学教育支援センター教授による、大規模授業でのアクティブラーニングについての講演と、本事業における各連携校の出向者たちによる、それぞれの大学での取組に関するパネルディスカッションを行った。第 4 回目は、筆者によるアクティブラーニングに関する説明と、河村敦くらしき作陽大学食文化学部准教授による ASB（Active Study Base）を活用した授業展開についての紹介が行われた。

2）事業運営

本学における事業に取り組むにあたって、円滑に推進できるように以下のことを行った。

・合同会議への出席

遠隔会議システムによる連携事業合同会議へ出席し、そこでの内容について学内の関係者との会議等をとおして報告を行った。

・事業推進責任者、代表者との打合せ

取組の進捗状況の確認、調整等のために、原則として前期は週 2 回、後期は担当授業の都合上週 1 回の頻度で、事業推進責任者および代表者との打合せを行った。

・研修会等の情報収集

国内で行われる、各種研修会等について情報収集を行い、アクティブラーニング等の本事業の取組に強く関連するものに関して学内関係者へ紹介を行った。

3）今後の課題

今年度、特に FD 研修会を行うことで昨年度の出向による成果の本学への還元を目指したが、小規模な活動しか行うことができず、十分な貢献ができたとはいえない。来年度以降も継続して行い、学内でのさらなる共通理解を図る必要がある。また、推進責任者や代表者との連携は密に行うことができたが、本事業関係教員、学内教職員との連携も充実させ、より一層全学的に取り組んでいけるように、ファシリテーターとしての役割に鋭意取り組んでいきたい。

補論２　淑徳大学におけるファシリテーターの役割

淑徳大学　高等教育研究開発センター
芹澤　高斉

平成 26 年度、関西国際大学への出向から帰校した筆者は、高等教育研究開発センター員として、淑徳大学の各キャンパス、各学部、学科単位で開催された FD 研修会や勉強会で、ルーブリックを中心に、講師やワークショップのファシリテーターを担当した。また、月例の高等教育研究開発センター会議の後に開催されるルーブリック研究会において、ファシリテーター役を果たしている。実習科目のルーブリックのカリブレーションへの参加、個々の教員によるルーブリック作成支援なども行った。

活動において、筆者は、出向中の成果を研修会などで還元すること、また、コモンルーブリックを配布するなど、その後の全学的な取組が円滑に進むよう配慮したことに加え、研修の目的等について各取組の責任者やワーキンググループと、事前に十分なコミュニケーションをとることを心がけた。淑徳大学では、帰校前に行われた高等教育研究開発センター員を中心とした取組を基礎として、平成 26 年度においては、コモンルーブリックの試行や実習のルーブリックの作成が行われている。

たとえば、看護栄養学部看護学科では、全学科的な取組として、平成 26 年度ルーブリック勉強会を立ち上げ、4 回のワークショップを経て、実習において使用するルーブリックが作成された。そのプロセスにおいて、評価の観点やルーブリックの暫定版が、学生が往来する廊下の掲示板に貼られ、横にぶら下げられたマジックで学生が自由にコメントを書けるようにするなど、ルーブリックの作成を学生と共有する試みが見られた。しかしながら、掲示された内容を見る学生はいたが、コメントを書き込んだ学生はいなかったとのことである。ルーブリックの作成への学生の参画は、外部評価委員会で委員から指摘された点の 1 つであるが、重要な課題であろう。

また、ワークショップの最終回において、完成されたルーブリックの運用法についても十分に話し合われ、教員間で共有された。教員間で理解や運用に差が出ないようにするためにも、このプロセスは重要であると考えられる。

そして、平成 26 年度後期、実習においてルーブリックが成績評価に活用された。筆者は、後期終了後、実習の成果物を用いたカリブレーションに参加した。そのカリブレーションにおけるふりかえりにおいて、いくつかの傾向が確認された。

まず、基本的に、成果物を用いたルーブリック評価に、教員間での顕著なばらつきは見られなかった。カリブレーションには、実習で学生の様子を観察している教員も参加しているが、興味深いことに、この教員が学生活動の観察からの評価と、筆者を含む他の教員による成果物での評価についても、顕著なばらつきは見られなかった。これらの点で、実習プログラムや成果物の内容にも依存する可能性はあるが、実習の学修成果を成果物で評価するツールとして、ルーブリックが有効である可能性が見出せた。

ただし、カリブレーションで使用された実習用のルーブリックの、6つの「規準」のうちの1つの評価の「規準」において、ばらつきが見られた。このことについて、カリブレーションに参加した教員と確認したところ、1つの「規準」に複数の序列のつきにくい要素が入っていることが判明した。この点で、ルーブリックの作成には、十分注意が必要であることが再認識された。

また、学生はルーブリックにおける到達目標を十分に意識はしていなかったことが、成果物から伺われた。この点から、ルーブリックとその活用法を学生と十分共有する重要性が確認された。

平成 26 年に本務校でのファシリテーターを果たす中で、下記のようなフィードバックを得ることができた。また、これらはワークショップなどでルーブリック作成のファシリテーターを勤める際には、参加者と共有し、ルーブリックの質の向上を図っている。

・ルーブリックは到達目標を学生と共有する上で有効なツールであり、学生の学習のモチベーションを向上させる。

・「記述」において、「論理的である」など学生が理解できない語句が含まれていると、ピア評価にばらつきが出る。

・ルーブリックを作成するプロセスで、複数教員で担当する授業や、実習の到達目標や評価の観点のズレを修正することができた。

これらを含めて、取組の中で得られた成果や、抽出された課題を連携校間で共有していくことが重要であると考える。

補論３　北陸学院大学におけるファシリテーターの役割

北陸学院大学・短期大学部
富岡　和久

1）北陸学院大学における事業学内推進組織

本学は小規模大学のため、高等教育研究センターは設置されていない。そのため、本学では教学マネジメント委員会を責任委員会として、既存の委員会を効率的に運営することにより事業の推進に当たっている。すなわち、学長を本事業の推進総責任者とし、その元に事業推進学内会議を位置付けた。

本会議は関西国際大学への出向者がファシリテーターとして推進事業取組責任者となり、大学および短期大学部の各学科（幼児児童教育学科、社会学科、食物栄養学科、コミュニティ文化学科）の教員、大学教務委員長、短期大学部教務委員長および事務責任者と事務担当者から構成されている。

会議のメンバーは教室内事業に関する部会、教室外プログラムに関する部会、ルーブリックの開発に関する部会と学生・教員へのアンケート調査に関する学内作業グループ、DP・CP の現状把握と見直し・アセスメントプラン構築の作業グループに分かれて活動している。

2）活動

出向者は、会議の運営のほかに適時教学マネジメント委員会に陪席して説明や提案を行う。また、後述の FD 部会の企画する学内 FD/SD 研修会で講師を務めることにより、事業内容の教職員への浸透を図る。

責任委員会である教学マネジメント委員会では各部会や作業部会がよりスムーズに活動できるように、学科長が部会活動と各学科のメンバー教員がそれぞれの学科での事業推進をサポートする。

さらに、既存の教務委員会、学生委員会、就職支援員会と教務委員会に属する FD 部会が推進事業に関連した企画・立案・実施を行う実行委員会の役割を担う。

出向者は関西国際大学での出向期間に同大学のアクティブな複数の授業に全単元あるいは部分的に参加した。また、授業外の各種企画にも参加してきた。帰学後は、出向中の見聞をもとに、全体での事業の推進を図るとともに、所属する短期大学部で、「キャリア開発セミナー」や「キャリアデザイン」と言った授業でアクティブな授業展開を試みるとともに、科目間の連動を強めて、学生がより能動的になるように努めた。また、授業外で就職支援の一環として、「グループワーク講座」や「プレゼンテーションスキルアップ講座」を開催した。

3）今後の課題

本学では最初に述べたように高等教育研究センターに相当する組織はないため、責任や権限があいまいなまま進んできた。そこで今後は責任をより明確にするとともに、学務的部分で学生とのか

かわりが強い教務委員会との連携を強化することにより、事業のより一層の推進を図る。

また、2016 年度に向けての全学的カリキュラム改革の最終段階として、アセスメントプランの策定と、学修支援 IR の構築に向けての活動を強化していく必要がある。